纪应用型高等教育
类课程规划教材

新世纪

日本近现代文学作品鉴赏

新世纪应用型高等教育教材编审委员会 组编
主编 孙立春

大连理工大学出版社
DALIAN UNIVERSITY OF TECHNOLOGY PRESS

新世纪应用型高等教育
日语类课程规划教材

新世纪

日本近现代文学作品鉴赏

新世纪应用型高等教育教材编审委员会 组编
主 编 孙立春
副主编 连永平

大连理工大学出版社
DALIAN UNIVERSITY OF TECHNOLOGY PRESS

图书在版编目(CIP)数据

日本近现代文学作品鉴赏/孙立春主编. —大连：大连理工大学出版社，2010.10

新世纪应用型高等教育日语类课程规划教材

ISBN 978-7-5611-5670-4

Ⅰ. ①日… Ⅱ. ①孙… Ⅲ. ①日语—阅读教学—高等学校—教材②现代文学—文学欣赏—日本③近代文学—文学欣赏—日本 Ⅳ. ①H369.4:I

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2010)第 142109 号

大连理工大学出版社出版

地址：大连市软件园路 80 号　邮政编码：116023

发行：0411-84708842　邮购：0411-84703636　传真：0411-84701466

E-mail：dutp@dutp.cn　URL：http://www.dutp.cn

大连印刷三厂印刷　大连理工大学出版社发行

幅面尺寸：185mm×260mm　印张：14.75　字数：339 千字

印数：1～2500

2010 年 10 月第 1 版　2010 年 10 月第 1 次印刷

责任编辑：梁　勃　责任校对：郑艳茹

封面设计：张　莹

ISBN 978-7-5611-5670-4　定　价：35.00 元

前　言

《日本近现代文学作品鉴赏》是新世纪应用型高等教育教材编委会组编的日语类课程规划教材之一。

日本具有悠久的文学传统，拥有丰富多彩的文学遗产，日本的小说、诗歌、戏剧和散文等都具有浓郁的民族特色，在世界文学长廊中绽放异彩。

本教材是编者结合自己多年的教学和研究经验，从浩如烟海的日本近现代文学作品中选取具有代表性的作家及作品编写而成，并根据我国大学教学的周时安排分为18课。本教材旨在通过阅读日本近现代文学作品，使学生掌握日本近现代文学作品的解读方法及不同流派的主要特征，提高理解、鉴赏文学作品的能力，了解日本近现代文学史的发展历程，从而提高学生的语言水平和文化修养。

作品正文除个别短篇为全文外，大部分是节选的精华部分。为便于学生理解，作品中的难读词语注有假名，作品中出现的难以理解的词汇也附有详细注释。每篇作品之后，设有“作家介绍”、“作品介绍”、“读解鉴赏”、“研究文献”以及“思考问题”五个大项，以便于学生全面深入地理解该作家、作品。

与已出版的同类教材相比，本教材有如下特色：

1. 选材精当，具有代表性。本教材所选作品基本涵盖了日本近现代文学史上主要流派代表作家的小说18篇，其中大部分是纯文学作品，但为了调动学生的学习兴趣，也适当编入了通俗小说和当代流行小说。

2. 内容丰富，体例合理。“作家介绍”部分详尽介绍了作家的生平、年谱、所属流派、主要作品、文学史地位等；“作品介绍”部分则详细介绍了作品的出版及修改情况、内容梗概及其他与作品相关的内容；“读解鉴赏”部分主要是围绕作品的主题思想、创作背景、人物形象、语言风格、叙事技巧等，分条目地进行了简要的分析；“研究文献”部分则列出了中日两国关于该作品的代表性研究成果；而“思考问题”部分则提示了学生应该注意并深入思考的要点、难点。

3. 学术研究性强。本教材主要面向日语专业高年级学生，并努力做到对硕士研究生的学习也有所帮助，同时也可作为日本文学爱好者学习和研究日本近现代文学的参考资料，所以本教材在编选的过程中，一直遵循以“读解鉴赏”为编选重点的理念，尽可能广泛地搜集中日学

者对该作家、作品的研究成果，认真筛选并列出代表性的观点。“研究文献”部分也提供了思考、研究的大量线索。这些都有利于学生多角度、多层次地鉴赏、研究该作品。

4.便于教学。除部分鉴赏文章外，基本上都用日文编写。本书在内容上充分注意点、线、面的统一，兼顾各主要流派、作家及其作品，兼顾经典作品与通俗、流行作品的选材比例。这样一来，教师就可以根据课时自由选择自己擅长的作品，不必每课都讲；学生也可以通过自学来了解日本近现代小说的整体面貌与特点，学习不同作家的语言风格和表达艺术。

本教材由杭州师范大学孙立春任主编，连永平任副主编。其中，第1课至第10课由孙立春编写并负责全书统稿，第11至16课由连永平编写。

尽管编者倾心而作，但书中难免有不尽如人意之处，敬请各相关院校教师和读者在使用本教材的过程中给予指正，并将意见及时反馈给我们。

所有意见和建议请发往：gzjckfb@163.com

欢迎访问我们的网站：http: //www.dutpgz.cn

联系电话：0411-84707604　84706231

编　者

2010年10月

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目　次

日本近現代文学史概説……1
第一課　浮雲……8
第二課　舞姫……20
第三課　金色夜叉……32
第四課　破戒……45
第五課　吾輩は猫である……58
第六課　城の崎にて……70
第七課　刺青……82
第八課　羅生門……95
第九課　伊豆の踊子……107
第十課　セメント樽の中の手紙……119
第十一課　山月記……128
第十二課　播州平野……140
第十三課　斜陽……153
第十四課　野火……165
第十五課　飼育……178
第十六課　点と線……190
第十七課　天平の甍……203
第十八課　ノルウェイの森……216
主要参考文献……229

日本近現代文学史概説

明治維新によって帝政国家となると、西洋の思想や文化を取り入れる文明開化が推進され、日本文学にも大きな影響を与えた。言文一致運動もその一つである。文学という語自体、翻訳語として創り出されたものであり、この頃に現在一般に使われ私たちが考える文学という概念が生まれた。そして、第二次世界大戦の敗北によって民主政国家になると、日本文学は全国規模のメディアの発達によって更に大きな変化を及ぼした。ここでは、戦前（近代）と戦後（現代）における日本文学の歴史を簡略に述べる。

第一章　近代文学

第一節　明治時代の文学

1.過渡期の文学と『小説神髄』

明治に入ってしばらくは江戸時代と同様の文芸活動が続いていた。明治18年から19年にかけて、坪内逍遥が日本で初めての近代小説論『小説神髄』を発表するまでの時期を「過渡期の文学」と称する。この期間の文学は、戯作文学・政治小説・翻訳文学の三つに分類される。

森有礼の呼びかけで発足した明六社は、啓蒙思想をもとに、明治という新社会においての実利主義的主張をした。これは大衆に広く受け入れられ、福沢諭吉『学問のすゝめ』、中村正直訳『西国立志編』、中江兆民訳『民約訳解』がよく読まれた。

戯作文学は、江戸時代後期の戯作の流れを受け継ぎつつ、文明開化後の新風俗を取り込み、人気を博した。仮名垣魯文は、文明開化や啓蒙思想家らに対して、これらを滑稽に描いた『西洋道中膝栗毛』（明治3年）、『安愚楽鍋』（明治4年）を発表した。

国会開設や、自由党、改進党の結成など、自由民権運動の高まりとともに明治10年代から政治小説が書かれるようになる。政治的な思想の主張、扇動、宣伝することを目的としているが、矢野竜渓の『経国美談』（明治16年～17年）、東海散士の『佳人之奇遇』といったベストセラーになった作品は、壮大な展開を持った構成に、多くの読者が惹きつけられた。坪内逍遥の『小説神髄』発表後は、その主張を受けて写実主義的要素が濃くなり、末広鉄腸の『雪中梅』はその代表的な作品である。

翻訳文学は、明治10年代になってさかんに西欧小説が移入され広まった。代表作は川島忠之助が翻訳したヴェルヌの『八十日間世界一周』（明治11年～13年）、坪内逍遥がシェークスピアの戯曲『ジュリアス・シーザー』を翻訳した『自由太刀余波鋭鋒』である。

2.近代文学の始まりと写実・浪漫主義

近代文学は西欧近代小説の理念の流入とともに始まり、坪内逍遥の『小説神髄』によって実質的に出発した。「小説の主脳は人情なり、世態風俗はこれに次ぐ」という主張に感銘を受け、二葉亭四迷が『小説総論』を書いた。これらの評論をもとに逍遥は『当世書生気質』（明治18年～19年）を書いたが、戯作の風情を多分に残していた。それらを克服して明治20年～22年に発表された四迷の『浮雲』は、最初の近代日本文学とされる。また、四迷は『あひゞき』『めぐりあ

ひ』といったロシア文学の翻訳をし、大きな影響を与えた。

こうした写実主義的な近代リアリズム小説が充実し始める一方、政治における国粋主義的な雰囲気の高まりにともなって、井原西鶴や近松門左衛門らの古典文学への再評価が高まった。明治18年、尾崎紅葉、山田美妙らが硯友社をつくり、「我楽多文庫」を発刊した。擬古典主義のもと、紅葉は『二人比丘尼色懺悔』『金色夜叉』を発表した。紅葉の女性的、写実的な作風に対して、男性的、浪漫的な作風で人気を博したのが幸田露伴である。『露団々』『風流仏』『五重塔』などの小説のほか、評論や古典の解釈など幅広く活躍した。露伴と紅葉が活躍した時期は「紅露時代」と呼ばれた。

森鴎外の登場によって、叙情的で芸術的な傾向をもつ浪漫主義文学が登場する。ドイツへの留学経験の題材にした『舞姫』(明治23年)などによって、近代知識人の自我の覚醒を描いた。この頃、北村透谷を中心とした雑誌「文学界」には浪漫主義的な作品が発表された。樋口一葉は、代表作『たけくらべ』『にごりえ』で注目されるが、24歳の若さで結核に倒れた。『高野聖』を発表した泉鏡花は、『婦系図』『歌行燈』で幻想的な世界を描いた。

3.自然主義

明治の終わりになると、ゾラやモーパッサンといった作家の影響を受け、自然主義が起こった。ヨーロッパの自然主義は遺伝学などを取り入れ客観的な描写を行うものであったが、日本では現実を赤裸々に暴露するものと受け止められた。島崎藤村の『破戒』(明治39年)に始まり、後に田山花袋の『蒲団』によって方向性が決定づけられた。花袋の小説は私小説の出発点ともされ、以後日本の小説の主流となった。自然主義作家としては、国木田独歩、徳田秋声、正宗白鳥らがおり、後に藤村も『家』『新生』、花袋も『田舎教師』を発表した。

この自然主義に対抗したのが夏目漱石である。当初漢詩や俳句を著していた漱石は、『吾輩は猫である』を発表し社会を批判した。ユーモアと諷刺とが織り交ざった作品を発表していたが、修善寺の大患後に『こゝろ』『明暗』といった作品で、人間の利己を追い求めた。また、鴎外も創作活動を再開し、『青年』『雁』などを書いた後、歴史小説に転じた。

4.明治の詩歌、演劇

詩では、外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎によって『新体詩抄』が刊行され、新体詩が盛んになる。

ドイツから帰国した森鴎外は翻訳詩集『於母影』を、北村透谷は『楚囚之詩』『蓬莱集』を出版した。透谷の「文学界」に参加していた藤村は『若菜集』を、藤村と並称された土井晚翠は、『天地有情』を刊行。これらは浪漫詩と呼ばれる。「文庫」では河井酔茗、横瀬夜雨、伊良子清白が活動した。

象徴詩では薄田泣菫、蒲原有明が活躍し、その後を受けて北原白秋、三木露風らが台頭した。「白露の時代」と呼称された。また、上田敏は、訳詩集『海潮音』を発表し、影響を与えた。

浪漫主義のうち、短歌では与謝野鉄幹が「明星」を創刊、与謝野晶子は『みだれ髪』を発表した。この一派であった石川啄木、窪田空穂も活躍を見せたが、特に啄木は『一握の砂』『悲しき玩具』を刊行した。

竹柏会を主催した佐佐木信綱は、「心の花」を創刊。正岡子規は『歌よみに与ふる書』を発表

し根岸短歌会を開き、伊藤左千夫、長塚節らが参加した。北原白秋、吉井勇らはパンの会を起こし、耽美派に繋がる歌を読んだ。

俳句では、子規や「ホトトギス」を中心に、高浜虚子、河東碧梧桐、内藤鳴雪らが輩出された。

また、演劇界にも自然主義の影響があり、逍遥、島村抱月らが文芸協会を立て、イプセンの『人形の家』の上演などを行った。文芸協会の解散後、抱月は松井須磨子らとともに芸術座を設置し、L.トルストイの作品などを上演し、『復活』が評判となった。このほか、小山内薫、2代目市川左團次により、自由劇場の活動が見られた。

第二節　大正時代

1.反自然主義の隆盛

自然主義が文壇の主流を占める中で、明治の終わりごろから夏目漱石や森鴎外といった反自然主義文学運動が起こった。

当初自然文学に傾倒していた永井荷風は、欧州から帰国後、『ふらんす物語』を発表した。荷風に激賞された谷崎潤一郎は『刺青』や『痴人の愛』などを書き、後期浪漫主義とも呼ばれる耽美派が生まれた。これは「スバル」「三田文学」を中心に活動した。ほかに佐藤春夫、久保田万太郎に代表される。

これに対し、自由・民主主義の空気を背景に、「白樺」で活動した白樺派の人々は、人道主義を主張した。『お目出たき人』『友情』の武者小路実篤や、『和解』『城の崎にて』の志賀直哉、『或る女』の有島武郎、『多情仏心』の里見弴らである。

大正中期からは東京帝大系統の「新思潮」で活動する新思潮派が漱石や鴎外の影響の下に現れ、芥川龍之介や久米正雄らの活動があった。龍之介は『鼻』で登場し、古典に取材した数多くの短編などで大正文壇の寵児となった。一方、菊池寛や山本有三などの劇作家の活躍もあった。また新早稲田派とも呼ばれる宇野浩二や広津和郎、葛西善蔵らによって心境小説、私小説が書かれた。

2.大衆小説の興隆

大衆小説は、明治期に尾崎紅葉の『金色夜叉』などの風俗小説が発展し、村上浪六、塚原渋柿園の髷物（撥鬢物）、押川春浪の冒険小説など通俗的な小説が書かれ、その先駆となった。

大正2年に、中里介山は「大乗小説」と称する大作『大菩薩峠』の連載を開始した。人間の業を描こうとした時代小説で、未完に終わったがその影響は大きく、大衆小説の出発点とされる。大正14年に刊行された「キング」には当時の人気作家がこぞって執筆し、特に吉川英治は高い人気を得、『鳴門秘帖』『宮本武蔵』などで国民作家の名を冠せられた。このほか講談や読本などが発展した時代小説では大佛次郎、白井喬二らが活躍した。

黒岩涙香の翻案小説などで紹介された探偵小説は、「新青年」に『二銭銅貨』でデビューした江戸川乱歩が数多く執筆し、多大な影響を与えた。このジャンルは甲賀三郎、横溝正史らのほか、江戸時代を舞台にした「捕物帳」と呼ばれる時代物が書かれた。

3.大正時代の詩歌

口語詩が次第に完成されていき、室生犀星、佐藤春夫、山村暮鳥らがそれを高めた。とくに『道程』の高村光太郎、『月に吠える』『青猫』の萩原朔太郎は口語自由詩を確かなものにした。

一方、堀口大学は翻訳詩『月下の一群』を発表し、宮沢賢治は東北に根付き『春と修羅』のほか、数多くの童話を書いた。

短歌では、正岡子規の精神を受け継ぎ、「アララギ」を舞台とする写実的なアララギ派が主流となる。中心人物は伊藤左千夫や長塚節らで、左千夫の死後は島木赤彦が積極的に活動し、アララギ派の地位を向上させた。同派の斎藤茂吉（歌集に『赤光』がある）や土屋文明も著名である。

俳句は、新傾向俳句を創作した河東碧梧桐の門下荻原井泉水が、「層雲」を開き自由律俳句を確立させた。これには尾崎放哉、種田山頭火が参加した。のち「層雲」を離れた碧梧桐は「海紅」を主宰し中塚一碧楼がこれを継いだ。ただし主流は、定型と季題を重視する高浜虚子らの「ホトトギス」であった。

第三節　戦前昭和時代

1.戦前昭和時代の文学

大正末期から、既成の文壇や個人主義リアリズムを批判して横光利一や川端康成らによる新感覚派がおこった。

また、政治状況を背景に大正10年に小牧近江らによって雑誌「種蒔く人」が創刊され、次いでプロレタリア文学の潮流が生まれた。

大正期以来の大家達の活動と平行して新興芸術派倶楽部と呼ばれる人々のモダニズム文学が始められ、梶井基次郎、井伏鱒二らの作品が書かれた。

満州事変以降の軍国主義的な空気の中でプロレタリア文学運動が発展し、小林多喜二の『蟹工船』、徳永直の『太陽のない街』、宮本百合子や葉山嘉樹、中野重治、佐多稲子、壺井栄の諸作品が生まれた。また、プロレタリア文学評論も活発となり、蔵原惟人、宮本顕治らの文芸評論が知識層に影響を与えたが、戦時体制の強化により弾圧を受け、逼塞を余儀なくされた。それに対して危機的な時局を背景に国粋的動向とともに保田與重郎ら日本浪漫派や蓮田善明らの文学活動が見られた。

昭和10年代の戦争を予感させた重苦しい時代には太宰治、織田作之助らの無頼派や日本や中国の古典に造詣の深い堀辰雄や中島敦らが作品を残した。一方、芥川賞や直木賞が制定され、文学がジャーナリズムの注目を浴びるようにもなった。

2.戦前昭和時代の詩歌

これまでの詩の形式を否定していく事で新しい詩を生み出そうとする実験精神が、大正末期ごろより勃興した。シュルレアリスムに影響を受けた西脇順三郎、ダダイズムに影響を受けた高橋新吉、吉行エイスケ、アナーキズム詩から発展したプロレタリア文学の詩の分野では中野重治、壺井繁治、小野十三郎、萩原恭次郎らが活躍し、構成主義に至った。また安西冬衛、北川冬彦、三好達治らが新散文詩運動（短詩運動）を展開。この時期は、これら諸芸術運動や人道主義、農本主義など、多様な運動が相互に影響しつつ発展した。

このころ村野四郎、北園克衛などが、モダニズム運動の中で、このほか小熊秀雄、金子光晴、山之口貘、田中冬二などの詩人も活動した。

戦争の到来によるモダニズム運動の退潮により、詩の世界も変化する。堀辰雄らが主宰する雑誌「四季」では、立原道造、津村信夫、丸山薫ほか「四季派」の詩人達が抒情詩の牙城を築き、

日本浪漫派からは伊東静雄が活躍した。

そのほか、草野心平、中原中也などもユニークな足跡を残した。

第二章　現代文学

第一節　冷戦時代（戦後昭和時代）

1.高度経済成長初期までの文学

プロレタリア文学の流れをくんだ中野重治や宮本百合子は、新日本文学会を創立して、民主主義文学運動をおこし、労働者の文学の力を発掘した。

雑誌「近代文学」の周辺から埴谷雄高、安部公房、三島由紀夫らが現れたほか、大岡昇平、井上靖、幸田文、円地文子らが旺盛な活動を見せた。

また、戦後派のうち島尾敏雄や梅崎春生の傾向は、「第三の新人」と呼ばれる小島信夫、安岡章太郎、庄野潤三、遠藤周作、吉行淳之介、阿川弘之らに受け継がれた。第一次戦後派作家、第二次戦後派作家の次に現れたため、「第三次戦後派作家」という意味の「第三の新人」と呼ばれる。

第三の新人以降、1956年に石原慎太郎が『太陽の季節』で「戦後の最初の宣言」として文壇に華々しく登場し、芥川賞の存在が一躍有名になった。ほかに大江健三郎、開高健、江藤淳、北杜夫などの有力、多彩な新人が登場する。

2.高度経済成長中期・末期

1968年、川端康成がノーベル文学賞を受賞。その2年後の1970年には、三島由紀夫が自衛隊市ヶ谷駐屯地において割腹自殺した。四部作『豊饒の海』最終部を脱稿した日の自決であった。

「内向の世代」と呼ばれる、心理描写の深さを追求する作家たちが現れたのもこの時期である。古井由吉、後藤明生、黒井千次らが有名になった。

戦後登場した作家たちが、長編に本領を発揮し始め、武田泰淳『富士』、大岡昇平『レイテ戦記』、福永武彦『死の島』、中村真一郎『頼山陽とその時代』、野間宏『青年の環』などの作品がある。

新日本文学会から離脱した者を中心に日本民主主義文学同盟が結成され、民主主義文学の伝統を引き継いだ。

1967年、散逸した近代文学関係の資料を収集・保存するため、文壇・学界・マスコミ関係の有志によって、東京目黒・駒場公園内に「日本近代文学館」が財団法人の運営で開館した（初代理事長:高見順）。

3.安定成長期

中上健次が戦後世代として、初めて芥川賞を受賞した。彼は、出身地である紀州にこだわった紀州三部作『岬』（芥川賞受賞・1975年）、『枯木灘』（1976年～1977年）、『鳳仙花』（1979年）で土着的文学世界を築いた。続いて『限りなく透明に近いブルー』（1976年）で覚せい剤と乱交にあけくれる若者を描き、村上龍が芥川賞受賞。『コインロッカー・ベイビーズ』（1980年）、『愛と幻想のファシズム』（1984年～1986年）など多くの小説を発表した。村上龍とともに語られるの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

が、1979年に『風の歌を聴け』で群像新人文学賞を受賞してデビューした村上春樹である。『羊をめぐる冒険』(1982年)などの英米文学の影響を受けた作風が支持された。『泥の河』(1977年)で宮本輝が登場し、『蛍川』(1977年)『道頓堀川』(1978年)を合わせた川三部作により戦後大阪の庶民の姿を描いた。1983年には『優しいサヨクのための嬉遊曲』で島田雅彦がデビューした。

その間にも檀一雄が『火宅の人』(1975年)、安岡章太郎が『流離譚』(1976年)、吉行淳之介が『夕暮まで』(1978年)、黒井千次が『群棲』(1981年～1984年)を、井上ひさしは『吉里吉里人』(1973年～1980年)を発表した。また、大江健三郎は『ピンチランナー調書』(1977年)、『同時代ゲーム』(昭和54年)の後、代表作の一つ『新しい人よ眼ざめよ』(1983年)を著した。

演劇の世界で活躍していたつかこうへいが『蒲田行進曲』(1981年)で直木賞を、同じく演劇人の唐十郎が『佐川君からの手紙』(1983年)で芥川賞を受賞し注目を集めた。

4.安定成長後

『光り抱くともよ』(1984年)で高樹のぶ子が登場。『鍋の中』(1987年)の村田喜代子、『由熙』(1988年)の李良枝らの芥川賞受賞の女性作家の活躍が見られた。芥川賞に何度もノミネートされた山田詠美は、『ソウルミュージックラバーズ・オンリー』(1987年)で直木賞。デビュー作『ベッドタイムアイズ』(1985年)など話題作を発表した。1987年、『キッチン』で評論家吉本隆明の次女、吉本ばなながデビューして「ばなな現象」を起こした。『うたかた/サンクチュアリ』(1987年)、『TUGUMI』(1988年～1989年)等により孤独で現代的な登場人物をみずみずしい感性で描いた。

デビュー後、着実に独自の世界観を作り上げてきた村上春樹は、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』(1985年)、『ダンス・ダンス・ダンス』(1988年)を発表。『ノルウェイの森』(1987年)は大ベストセラーになり、上下巻で460万部以上を売った。また、宮本輝は『優駿』(1986年)で幅広い読者を得た。

5.冷戦時代の日本の詩歌

第二次世界大戦後、盛んになったのが現代詩である、各詩人によって、作風が大きく異なり、共通するものが少ない「分散性」が現代詩の一つの特徴だが、あえて共通要素をとりだすとしたら、私的性が強い事が挙げられる。

詩誌「荒地」を中心に集まった詩人、鮎川信夫、田村隆一、吉本隆明、詩誌「櫂」を中心に集まった詩人、川崎洋、谷川俊太郎、大岡信、吉野弘のほか、石原吉郎、飯島耕一、黒田三郎、吉岡実、入沢康夫、天沢退二郎、吉増剛造、荒川洋治らが、また石垣りん、茨木のり子、伊藤比呂美ら女性詩人も活躍した。

さらに新奇な表現を求めて、1980年代から1990年代にかけて、ねじめ正一や谷川俊太郎らのナンセンス詩に発展した。

第二節　冷戦終結後(平成時代)

1.平成一桁時代の文学

小川洋子の『妊娠カレンダー』(1990年)、荻野アンナの『背負い水』(1991年)、多和田葉子の『犬婿入り』(1992年)と女性作家の時代を印象付けた。多和田はドイツ語でも作品を発表し、日

本語との間に新たな関係性を見出しつつ作品を発表し続ける。1981年に『極楽』で群像新人文学賞を受賞しデビューした笙野頼子が『タイムスリップ・コンビナート』(1994年)で芥川賞を受賞するなど、フェミニズムと文学の問題を考える作家が多様に現れた。後に『「我輩は猫である」殺人事件』などで、純文学ミステリー作家と呼ばれるようになった奥泉光が『石の来歴』(1993年)で芥川賞を受賞した。

ベテラン勢では筒井康隆『文学部唯野教授』(1990年)、河野多恵子『みいら採り猟奇譚』(1990年)、開高健『珠玉』(1990年)、丸谷才一『女ざかり』(1992年)、遠藤周作『深い河』(1993年)などが健筆ぶりを見せた。中上健次が『軽蔑』(1992年)を発表、彼の文学の系譜がいよいよ鮮やかになったが、同年死去。1994年、大江健三郎がノーベル文学賞を受賞した。村上春樹は三部からなる大作『ねじまき鳥クロニクル』(1992年～1995年)を発表した。

2.平成10年代の文学

J-POPという音楽に応じて雑誌『文芸』が名づけたJ文学が現れ、ロックをはじめとする音楽、映画、写真など、文学の大衆文化との接点が強調されるようになった。渋谷系、新宿系など、小説に町の名前を冠して売り出すことが行われた。町田康、赤坂真理、星野智幸、吉田修一、阿部和重、藤沢周ら1990年代に登場した作家が、広くJ文学にカテゴライズされた。

『日蝕』で芥川賞を受賞した平野啓一郎は、現代ではあまり使われない漢語を多用した擬古文体で登場。京都大学の現役学生であった事からマスコミに多く登場した。『家族シネマ』の柳美里、『海峡の光』の辻仁成らは、アダルトチルドレンやトラウマといった、心理学の流行語で読み解かれた。『蛇を踏む』で芥川賞を受賞した川上弘美は、2001年『センセイの鞄』を発表し、広く受け入れられた。

また文学賞の低年齢化も話題を呼び、最年少で第130回芥川賞を受賞した綿矢りさや金原ひとみなど、10代でデビューした若い作家の活躍も目立ってきている。

3.平成20年代の文学

2009年、ノーベル文学賞の有力候補と報じられる村上春樹が『1Q84』を発表し、同年の文芸書の最多売り上げを記録して健在ぶりを示した。

第一課　浮雲

第十九回

お政は、いうまでもなく、死灰の再び燃えぬうちに、早く娘を昇に合せて多年の胸の塊を一時におろしてしまいたいが、娘が、思うように、如才なくたちまわらんので、それで歯痒がって気を揉み散らす。昇はそれを承知しているゆえ、後の面倒を慮って迂闊[1]に手は出さんが、罠のと知りつつ、油鼠[2]の側を去られん老狐の如くに、遅疑しながらも、尚おお勢の身辺を廻って、横眼で睨んでは舌舐り[3]をする（文三は何故か昇の妻となる者は必ず愚で醜い代り、権貴な人を親に持った、身柄の善い婦人とのみ思いこんでいる）。お政は昇の意を見抜いてい、昇もまたお政の意を見抜いている、しかも互に見抜れていると略ぼ心附いている。それゆえに、故らに無心な顔を作り、思慮の無い言を云い、互に瞞着しようと力めあうものの、しかし、双方共力は牛角のしたたかものゆえ、優もせず、劣もせず、挑み疲れて今はすこし睨合の姿となった。総てこれ等の動静は文三も略ぼ察している。それを察しているから、お勢がこのような危い境に身を処きながら、それには少しも心附かず、私欲と淫欲とが爍して出来した、軽く、浮いた、汚わしい家内の調子に乗せられて、何心なく物を言っては高笑をする、その様子を見ると、手を束ねて安座していられなくなる。

お勢は今甚だしく迷っている、豕を抱いて臭きを知らずとかで、境界の臭みに居ても、おそらくは、その臭味がわかるまい。今の心の状を察するに、譬えば酒に酔った如くで、気は暴ていても、心は妙に昧んでいるゆえ、見る程の物聞く程の事が眼や耳やへ入っても底の認識までは届かず、皆中途で立消をしてしまうであろう、また徒だ外界と縁遠くなったのみならず、我内界とも疎くなったようで、我心ながら我心の心地はせず、始終何か本体の得知れぬ、一種不思議な力に誘われて言動作息するから、我にも我が判然とは分るまい、今のお勢の眼には宇宙は鮮いで見え、万物は美しく見え、人は皆我一人を愛して我一人のために働いているように見えよう、若し顔を皺めて溜息を吐く者が有れば、この世はこれほど住みよいに、何故人はそう住み憂く思うか、殆どその意を解し得まい、また人の老やすく、色の衰え易いことを忘れて、今の若さ、美しさは永劫[4]続くように心得て未来の事などは全く思うまい、よし思

---

1 迂闊　注意の足りないこと。うっかりしているさま。
2 油鼠　油であげた鼠。狐を捕まえる餌という。
3 舌舐り　うまい獲物などを待ち構えること。
4 永劫　無限に長い年月。

ったところで、華かな、耀いた未来の外は夢にも想像に浮ぶまい。昇に狎れ親んでから、お勢は故の吾を亡くした、が、それには自分も心附くまい、お勢は昇を愛しているようで、実は愛してはいず、只昇に限らず、総て男子に、取分けて、若い、美しい男子に慕われるのが何となく快いので有ろうが、それにもまた自分は心附いていまい。これを要するに、お勢の病は外から来たばかりではなく、内からも発したので、文三に感染れて少し畏縮た血気が今外界の刺激を受けて一時に暴れだし、理性の口をも閉じ、認識の眼を眩ませて、おそろしい力を以て、さまざまの醜態に奮見[5]するので有ろう。若しそうなれば、今がお勢の一生中で尤も大切な時、能く今の境界を渡り課せれば、この一時にさまざまの経験を得て、己の人と為りをも知り、所謂放心を求め得て始て心でこの世を渡るようになろうが、若し躓けばもうそれまで、倒たままで、再び起上る事も出来まい。物のうちの人となるもこの一時、人の中の物となるもまたこの一時、今が浮沈の潮界、尤も大切な時で有るに、お勢はこの危い境を放心して渡っていて何時眼が覚めようとも見えん。

このままにしては置けん。早く、手遅れにならんうちに、お勢の眠った本心を覚まさなければならん、が、しかし誰がお勢のためにこの事に当ろう？

見渡したところ、孫兵衛は留守、仮令居たとて役にも立たず、お政は、あの如く、娘を愛する心は有りても、その道を知らんから、娘の道心[6]を縊殺そうとしていながら、しかも得意顔[7]でいるほどゆえ、固よりこれは妨になるばかり、ただ文三のみは、愚昧ながらも、まだお勢よりは少しは智識も有り、経験も有れば、若しお勢の眼を覚ます者が必要なら、文三を措いて誰がなろう？

と、こうお勢を見棄たくないばかりでなく、見棄ては寧ろ義理に背くと思えば、凝性[8]の文三ゆえ、もう余事は思っていられん、朝夕只この事ばかりに心を苦めて悶苦んでいるから、あたかも感覚が鈍くなったようで、お政が顔を皺めたとて、舌鼓を鳴らしたとて、その時ばかり少し居辛くおもうのみで、久しくそれに拘ってはいられん。それでこう邪魔にされると知りつつ、園田の家を去る気にもなれず、いまに六畳の小座舗に気を詰らして始終壁に対って歎息のみしているので。

歎息のみしているので、何故なればお勢を救おうという志は有っても、その道を求めかねるから。「どうしたものだろう？」という問は日に幾度となく胸に浮ぶが、いつも浮ぶばかりで、答を得ずして消えてしまい、その跡に残るものは只不満足の三字。その不満足の苦を脱れようと気をあせるから、健康な智識は縮んで、出過た妄想が我から荒出し、抑えても抑え切れなくなって、遂にはまだどうしてという手順をも思附き得ぬうちに、早くもお勢を救い得た後の楽しい光景が眼前に隠現き、払っても去らん事が度々有る。

---

5 奮見　ふるいあらわれる。
6 道心　私欲におおわれない心。本心。
7 得意顔　してやったぞという得意そうな顔つき。ほこりがお。
8 凝性　物事に熱中して、程度をこえて徹底する性質。

しかし、始終空想ばかりに耽っているでも無い、多く考えるうちには少しは稍々行われそうな工夫を付ける、そのうちでまず上策というは、この頃の家内の動静を詳く叔父の耳へ入れて父親の口から篤とお勢に云い聞かせる、という一策で有る。そうしたら、或はお勢も眼が覚めようかと思われる。が、また思い返せば、他人の身の上なればともかくも、我と入組んだ関係の有るお勢の身の上をかれこれ心配してその親の叔父に告げると何となく後めたくてそうも出来ん。仮使思い切ってそうしたところで、叔父はお勢を諭し得ても、我儘なお政は説き伏せるをさて置き、却って反対にいいくるめられるも知れん、と思えば、なるべくは叔父に告げずして事を収めたい。叔父に告げずして事を収めようと思えば、今一度お勢の袖を扣えて打附けに搔口説く[9]外、他に仕方もないが、しかし、今の如くに、こう齟齬っていては言ったとて聴きもすまいし、また毛を吹いて疵を求めるようではと思えば、こうと思い定めぬうちに、まず気が畏縮けて、どうもその気にもなれん。から、また思い詰めた心を解して、更に他にさまざまの手段を思い浮べ、いろいろに考え散してみるが、一つとして行われそうなのも見当らず、回り回ってまた旧の思案に戻って苦しみ悶えるうちに、ふと又例の妄想が働きだして無益な事を思わせられる。時としては妙な気になって、総てこの頃の事は皆一時の戯で、お勢は心から文三に背いたのでは無くて、只背いた風をして文三を試ているので、その証拠には今にお勢が上って来て、例の華かな高笑で今までの葛藤を笑い消してしまおうと思われる事が有る、が、固より永くは続かん、無慈悲な記憶が働きだしてこの頃あくたれた時のお勢の顔を憶い出させ、瞬息の間にその快い夢を破ってしまう。またこういう事も有る、ふと気が渝って、今こう零落していながら、この様な薬袋も無い[10]事に拘って徒に日を送るを極て愚のように思われ、もうお勢の事は思うまいと、少時思の道を絶ってまじまじとしていてみるが、それではどうも大切な用事を仕懸けて罷めたようで心が落居ず、狼狽てまたお勢の事に立戻って悶え苦しむ。

人の心というものは同一の事を間断なく思っていると、遂に考え草臥て思弁力の弱るもので。文三もその通り、始終お勢の事を心配しているうちに、何時からともなく注意が散って一事には集らぬようになり、おりおり互に何の関係をも持たぬ零々砕々の事を取締もなく思う事も有った。曾つて両手を頭に敷き、仰向けに臥しながら天井を凝視めて初は例の如くお勢の事をかれこれと思っていたが、その中にふと天井の木目が眼に入って突然妙な事を思った、「こう見たところは水の流れた痕のようだな」、こう思うと同時にお勢の事は全く忘れてしまった、そして尚お熟々とその木目に視入って、「心の取り方に依っては高低が有るようにも見えるな。ふふん、『おぷちかる、いるりゅうじょん』[11]か」。ふと文三等に物理を教えた外国教師の立派な髯の生えた顔を憶い出すと、それと同時にまた木目の事は忘れてしまった。続いて眼前に七八人の学生が現われて来たと視れば、皆同学の生徒等で、或は鉛筆を耳に挿んでいる者も有れば、或は

9 搔き口説く　自分の意に従わせようとしつこく言う。特に異性に対して、愛情を打ち明け、言い寄る。
10 薬袋もない　役に立たない。つまらない。
11 おぷちかる、いるりゅうじょん　視覚上の錯覚、錯視。

書物を抱えている者も有り又は開いて視ている者も有る。能く視れば、どうか文三もその中に雑(まじ)っているように思われる。今越歴(エレキ)[12]の講義が終って試験に掛る所で、皆「えれくとりある、ましん」[13]の周囲に集って、何事とも解らんが、何か頻(しき)りに云い争いながら騒いでいるかと思うと、忽ちその「ましん」も生徒も烟の如く痕迹(あとかた)もなく消え失せて、ふとまた木目が眼に入った。「ふん、『おぷちかる、いるりゅうじょん』か」と云って、何故ともなく莞爾(にっこり)した。「『いるりゅうじょん』と云えば、今まで読だ書物の中でさるれえ[14]の「いるりゅうじょんす」ほど面白く思ったものは無いな。二日一晩に読切ってしまったっけ。あれほどの頭にはどうしたらなるだろう。余程組織が緻密に違いない……」。さるれえの脳髄とお勢とは何の関係も無さそうだが、この時突然お勢の事が、噴水の迸(ほとばし)る如くに、胸を突いて騰(あが)る。と、文三は腫物にでも触られたように、あっと叫びながら、跳ね起きた。しかし、跳ね起きた時は、もうその事は忘れてしまった、何のために跳ね起きたとも解らん。久く考えていて、「あ、お勢の事か」と辛くして憶い出しは憶い出しても、宛然(さながら)世を隔てた事の如くで、面白くも可笑(おかしく)も無く、そのままに思い棄てた、暫くは惘然(ぼうぜん)として気の抜けた顔をしていた。

こう心の乱れるまでに心配するが、しかし只心配するばかりで、事実には少しも益が無いから、自然は己が為べき事をさっさっとして行ってお勢は益々深味へ陥る。その様子を視て、さすがの文三も今は殆ど志を挫(くじ)き、とても我力にも及ばんと投首(なげくび)をした[15]。

が、その内にふと嬉しく思い惑う事に出遇った。というは他の事でも無い、お勢が俄に昇と疎々しくなった、その事で。それまではお勢の言動に一々目を注(つ)けて、その狂う意の跟(あと)を随(した)いながら、我も意を狂わしていた文三もここに至って忽ち道を失って暫く思念の歩を留めた。あれ程までにからんだ両人の関係が故なくして解(ほつ)れてしまう筈は無いから、早まって安心はならん。けれど、喜ぶまいとしても、喜ばずにはいられんはお勢の文三に対する感情の変動で、その頃までは、お政程には無くとも、文三に対して一種の敵意を挾んでいたお勢が俄に様子を変えて、顔をあからめ合た事は全く忘れたようになり、眉を皺め眼の中を曇らせる事はさて置き、下女と戯れて笑い興じている所へ行きがかりでもすれば、文三を顧みて快気(こころよげ)に笑う事さえ有る。この分なら、若し文三が物を言いかけたら、快く返答するかと思われる。四辺(あたり)に人眼が無い折などには、文三も数々話しかけてみようかとは思ったが、万一に危む心から、暫く差控ていた——差控ているは寧しろ愚に近いとは思いながら、尚お差控ていた。

編物を始めた四五日後の事で有った、或日の夕暮、何か用事が有って文三は奥座敷へ行こうとて、二階を降りてと見ると、お勢が此方へ背を向けて縁端(えんばな)に佇立(たたず)んでいる。少しうなだれて何か一心に為ていたところ、編物かと思われる。珍らしいうちゆえと思いながら、文三は何心なく

12 越歴　オランダ語で、電気のことを言う。
13 えれくとりある、ましん　電気機関。
14 さるれえ　イギリスの心理学者、美学者。
15 投首をした　思案にくれた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com